

「……けっこうお疲れかな？今日もあんま濡れないね」

「あ…、ごめん」

「いやいや謝ることじゃないよ、俺ももっと頑張るね、今日はもう寝よう」

「うん…」

結婚生活が始まっていわゆる新婚期だというのに、夢子たち夫婦はセックスの回数が減りつつあった。

原因は夢子にある。

結婚直前に自分が担当しているアイドル三人とセックスしたことが忘れられないのだ。

恋人だった夫とする二人でのセックスとは正直、比べものにならない刺激だった。

あの強烈な快感が忘れられない。

（やっぱりあのときもっとちゃんと止めればよかった、流されてあんなことするんじゃないかった…）

夫のことはもちろん愛している。不満もない。

100%自分が悪い。

だからあれから三人とはセックスすることはなかった。
三人からも誘われることもなかった。

夢子は背を丸めて布団の中に潜り込む。

隣の夫は夢子が落ち込んでいると思ったのかその背中にぴったりとくっつき抱きしめてきて。

セックスすることを断念した二人はお互いの体温を感じながら眠った。

「——…どこが誕生日パーティー？」

その日、夢子は景悟の家に呼ばれていた。

誕生日が近い景悟に「オレの家でパーティーするからお前も来い」と言われ、どうせ芸能人ばかりのところに自分が行っても場違いだろうと思い始めは断っていた。

しかし三人に何度もしつこく誘われ断りきれず…。

結局プレゼントも用意した上で来てしまったのだ。

けれど、来てみると景悟の家には景悟と葵と祥太の他

に誰もいない。何も準備などされていない。

「あー…もしかして準備から手伝わせるために呼んだ感じ？だったらそれ用の着替え持ってきたのに」

だだっ広いリビングのソファーに自分の荷物を勝手に置いて辺りを見回す。

…ただ、カウンターキッチンのほうを見ても食材などが用意されている様子はない。

というか、これから何人と芸能人を呼んでパーティーをするような雰囲気はまるでない。

それに三人ともそんな格好じゃない。いつものラフな服装だった。

「……？」

夢子が首を傾げていると、葵がおどけた調子でひょこっと視界に入ってきた。

「夢子ちゃん、こうでもしないと相手してくれないかなって」

「え、」

そのまま葵は夢子を優しく抱きしめる。

瞬間、夢子は悟った。

これは誕生日パーティーではない。そんなもの初めからなかった。

自分は騙されたのだ。

「仕事中は普段通りだけど、それ以外の時間は僕たちのこと避けてるよね」

「ちゃんと切り替えができていてさすがです。まあ俺たちもそのへんはちゃんとしてるつもりですが」

「夢子、こっち来い」

葵に捕まっている夢子の手を景悟が取って、乱暴とも言える力で連れていこうとする。

寝室の方へ。

「ま、って…！待って待って待って！」

「お前に拒否する権利なんてねーだろ」

「いやあるでしょ、何言ってるの！？」

「僕たち充分待ったよ？もう待てないからこうしてるの♡」

「こら葵、夢子さん歩きにくいからそろそろ離れなさい」

景悟に手を引っ張られ、葵に体ごと押され、夢子の足

は無理にでも動かされてしまう。

景悟の家には何度か来たことがあった。

この先の部屋を知っている。入ったことはないが見たことはある。夢子の生活とは無縁のバカ広いベッドにおしゃれな間接照明、高級ホテルのような寝室。

扉が開けられそれらが視界に入ってきた瞬間、あまりに生々しくて夢子の中に得体の知れない何かが湧き上がった。

寝室のにおい。普段景悟がつけている香水のような優しい香りがして、いつもここで景悟が寝ているのだと実感させられる。

ここで逃げなければ今から自分はまたこの三人とセックスするのだ。

いつも景悟が寝ているこのベッドで。

(……やば、)

湧き上がってきた得体の知れないものは下半身から体の中をチリチリと火を灯しながら広がっていくようだった。

この雰囲気だけで、正直クリトリスはもう痛いくらいパンパンになってきている。

部屋に入りきってしまったところで葵から解放されたかと思えば、景悟に腕を引かれそのまま景悟に覆い被さる形でベッドに倒れ込んだ。

後ろで祥太が扉を閉め、一気に部屋が薄暗くなる。壁の間接照明が淡く灯っているだけ。

「だめ、だめだよ」

「うるせ」

腰をがっちりと景悟に抱え込まれ、その唇が近づいてきた。

顔を背ければ回避できるのに一瞬迷ってされるがままに唇を押し付けられた。舌が隙間をつつき、ひるんで少しだけ開けると舌が入ってくる。

この間のセックス以来の舌に、背中がぞくぞくと震える。

その唇は顎、首筋、鎖骨と音を立てて降りていって。夢子にしては無理しておしゃれしてきた薄いワンピースを解いていく。

それから手は背中に回って、下着のホックも外してしまった。

(またこのまま流される…！だめだ、もう止めないと！)

夢子が少しでも景悟から離れようと体を少し浮かせると、その隙に胸と景悟の体の間に手が滑り込んできた。

その手はそのままワンピースを腰までずり下げ、ブラジャーの引っ掛かった胸を包むように撫でる。

まだ勃起あがっていなかった乳首まで撫で上げて、一瞬にしてそこがじわっと熱を帯びてしまった。あっという間に痛いほど硬くなってしまう。

「やっとさわれた…」

噛み締めるようにそう言われ不覚にも胸がときめいてしまったが、景悟の唇がそのまま硬くなったそこに触れて夢子は「あ…！」と小さな声をあげて景悟の上で体を弾ませた。

唇が、すりすりと乳首に擦りつけられる。

勃起あがったそこがその弱い力でくにくにと揺らされ、そこから夢子の背筋を快感が走っていく。

「夢子ちゃん、僕もキスしたい」

景悟と夢子を見ていてか、欲情した表情の葵が夢子の正面へ回ってきた。

「せっかく可愛いワンピース着てきてくれて申し訳ないですが、汚す前に脱いじゃいましょうね」

そして背後から祥太が中途半端に下げられていたワンピースに手を伸ばす。

もう三人に囲まれている。
これで逃げられるわけがない。

「……っ、」

葵のキスは最初から激しく夢子を求めるようなキスだった。

舌は遠慮なく夢子の中へ差し込まれ、絡んできたかと思えば、舌尖を唇で吸われた。

ちゅ、ちゅ、と音を立ててあやすように吸われる。

(だめ…、だめ…)

最早なんの意味もない、思考だけでする薄っぺらい抵抗は三人に次々とかき消される。

ワンピースも下着も、とっくにベッドの端に追いやられている。

ちゅ、ちゅぽ…

「……ふ、は」

葵に顎を掬われ、舌先を吸い出されて。
そのままあやすように音を立てて吸われる。
既にとろけた顔でされるがままになっていると。

れる…

「……っ！！」

ざらついた舌が乳首を舐め上げた。

れる…れる…、

ゆっくり、わざと意識させるように。
舌が乳首を上へ折り曲げ、先端まで舐めあげると軽く
弾いて乳首を震わせる。

「…っ、う、…んっ♡」

何度も繰り返されるそれに夢子の体はびくびくと震え

るが、しっかり景悟に抱きしめられていて思うように体が動かせなかった。

「…夢子ちゃん、もう気持ちよくなっちゃってる、もっと気持ちよくなりたい？」

「ちがう、よくない…」

「夢子ちゃんの気持ちいいところ、触ってあげるね」

小さい子にするように乳首を吸われビクビクと震える夢子の頭を撫でて、葵は祥太と位置を変わった。

背中に抱きつくように腕を回してきたかと思えば、その手は夢子の下半身へ伸びる。

「夢子さん、俺ともキスしてください」

「……あ」

祥太の顔がゆっくりと迫ってきて、一度唇を吸われると今度は粘膜同士が隙間なく合わさるように深く口付けられた。

あたたかいその粘膜は吸い付いてくるようにねっとりと密着を楽しんで、もっと奥へ奥へと進もうとしてくる。

「…む、う♡……んんっ♡」

「夢子ちゃんもう濡れてる♡」

「…っは、あッ♡♡」

「本当は僕たちとシたかったんだよね♡知ってる♡」

祥太のキスに夢中になっていると葵が割れ目をなぞって愛液を掬いあげ、それを優しい手付きでクリトリスに塗りつけた。

勃起していることを自覚するほど敏感になってしまっているそこにぬるぬると塗りつけられて。

そして。

しこ…っ♡

と葵の細い指が上下に擦りだした。

「うんんっ♡♡やめ…！」

「暴れんな、よくしてやるから」

「ほら夢子さん、俺とキスしてましようね」

(やばいやばい、イカされる…！)

唇を擦りつけていた景悟も乳首の先端を唇に埋め、むちゅむちゅ♡と乳首を刺激してきて。

口内の薄い粘膜は祥太に吸い付かれ、クリトリスは葵にしごかれて。

「あは♡なんかうつ伏せになってる夢子ちゃんのクリちゃんしこしこしてるとクリちゃんちんぽになっちゃったみたいだね♡大きくなっててしこりやすい♡」

「な…っ、」

「夢子さん、ちゃんとキスしてて」

「あむ…♡」

恥ずかしくなって癸を止めようとするがすぐさま祥太に引き戻された。

このままイカせる気らしい。景悟の抱きしめる力もいつの間にか強くなっている。

「夢子ちゃんのちんぽ♡ぬるぬるが先っぽまで垂れてきて景悟くんの服汚しちゃってるよ？♡こんなにちっちゃいのにあっちなおちんぽだね♡僕がしこしこしてイかせてあげるね♡ちんぽちゃんよしよし♡♡まず一発目、イっちゃおうね♡」

(いや…！イきたくない！イっちゃったら…)

それでも、乳首と唇とクリトリスからの快感が夢子をじわじわと責め立てて。

「……っ、ふ、う♡♡ま、まって♡♡葵…！！」

「あ～♡夢子ちゃんイきそうでしょ♡ちんぽちゃんバキバキになってきた♡可愛くイクイク～♡しようね♡♡」

「あお、い……っ、うあ……ツツ！！♡♡」

景悟にしがみついたまま、夢子は最初の絶頂を迎えた。
強張っていた体は少しずつ力が抜けていって、景悟の体へと沈んでいく。

満足のいくセックスをしばらくしていなかった夢子は、
あっという間に体中が快感で満たされる感覚にしばらく動けなかった。

まるでときめいているように胸が高鳴って、多幸感があつて。

脱力している体も、逆に心地いい。

(この感覚、まずい…)

頭の中にそう警告している自分もいるのに、

「こんなもんじゃ夢子は満足しないよな？」

景悟に体をひっくり返されても抵抗を忘れた。

「ちょっと待って…」

「クリまだピクピクしてんじゃん」

膝を開かれそこに景悟の顔が近づいてくる。

そしてさっきまで乳首にキスしていた唇が今度はクリトリスにキスし出した。

「…ッ！」

反射的に体がビクつく。

唇が小さく音を立てて敏感になっているクリトリスの先端を吸うと、鋭利な快感を与えられているようで。

またすぐ、気持ちよくなってしまう。

ちゅ♡

ちゅ♡

ときどき唇をぺろりと舐めて湿らせて、また唇がくっついて、吸って…。

「……っ♡」

「夢子さん本当クリ好きですね、イってもイっても終わらないんじゃないですか？」

「じゃあ僕と祥太で乳首もしてあげよ〜♡気持ちいいとこ一緒にいじられるの好きだもんね♡」

口をぎゅっと結んで気持ちよくなることを我慢しているのに。

横から葵と翔太に抱きつかれ、二人はクリと同じように萎えんでいた乳首に舌を這わせた。

「うあ…っっ！♡♡」

それぞれの舌がバラバラの動きで勃起促進するように乳首を舐めあげる。

チロチロと小刻みに舌を動かす葵と、ねっとりと根元から先端まで丁寧に沿っていく祥太。

クリトリスと同じようにピンポイントに乳首に与えられる快感で夢子の体は葵と祥太の腕の中で跳ねている。

ちゅ、ちゅ♡

れろれろ♡れろ…♡

(気持ちよくなりたくない…！)

体を動かしてこの気持ちいいのから逃げようとしても

二人の腕と景悟の手がそれを許すわけもなく。

「……ひ、」

それどころか、景悟に吸われているクリトリスの下、夢子の割れ目を景悟の指がなぞったかと思えば。

ぬる…♡

ゆっくりと埋め込むようにその指が入ってきた。
ぬめる自分の粘膜が、景悟の指を包むのがわかる。
その指が充分に濡れるともう一本指が入ってきた。

「だめ、だめ…っ、ナカは、」

三人に触られている箇所に意識が集中してしまう。
両方の乳首に、クリトリスに、膣内に。
乱暴にされるわけでもない。
自分を気持ちよくしてくれるためだけに動いている。

「……っ、は、あ♡だめだって…」

夢子が否定の声をあげてもそれに返事はなく。
三人は懸命に夢子を責めたてた。

れろれろ♡れろ♡れろ…♡

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅ、ちゅう♡

ぬぽっ♡ぬぽっ♡ぬぽっ♡ぬぽっ♡

ナカが慣れてきた頃。

夢子のナカをただただ出入りしていた指がふいにほんの少しだけ曲げられた。

そのほんの少しの引っ掛かりが膣内に空洞を作り、出入りする音が余計に響く。

それは夢子を煽るのに充分だった。

ぬぽっ♡ぬぽっ♡ぬぽっ♡

「いや…っ♡それ、やだ、指やだぁ…」

「さっきからイヤイヤって、本気で抵抗してねーくせに」

「夢子ちゃんもっかいイかせちゃおっか♡」

「そうですね、もうそろそろ」

それが合図かのように。

ちゅうううっっ♡♡♡

れろれろれろれろれろれろれろっ♡♡♡

ぬぼぬぼぬぼぬぼぬぼぬぼっ♡♡♡

「…………っああああ！！♡♡」

三人の動きは先ほどまでとは全く違う、夢子を快感へ墮とす動きに変わった。

あまりに急に責め立てられ夢子の体はまた暴れてしまう。やはり叶わないけれど。

ぢゅうううっ！！♡♡ぢゅぼっ♡ぢゅぼっ♡ぢゅぼっ♡

れろれろれろれろ…！！♡♡れろれろっ♡♡♡

ぬぼぬぼぬぼぬぼぬぼぬぼっ！！♡♡

「いや…！あゝッ♡♡だめ、だめだめ！！♡やめ、♡ああゝあ…っ！！♡♡」

両側の葵と祥太の腕を必死に掴んで耐えようとする。
二人の体はびくともしない。

ぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼっ！！♡♡

れろれろれろれろれろれろっ！！♡♡

ぬぼぬぼぬぼぬぼぬぼぬぼっ！！♡♡

夢子のガタガタと痙攣する体は三人の男にしっかりと押さえつけられていた。

「だめ、なんだって…♡♡…ん、あゝ♡♡あっ♡あっ♡あっ♡やだやだやだ、イク……っ♡♡イク……ツツ！！♡♡♡うゝ…うツツツ♡♡♡」

びく、びく…っ！

腰を浮かせ、またイってしまった。

ビクつく夢子の体から労るように丁寧に離れた景悟は、夢子の余韻が落ち着く前に夢子の股間を陣取った。

前をくつろげ取り出したそれはもう既に勃ちあがって夢子を狙っている。

顔を腕で隠し未だ大きく口を開け一生懸命息を吸う夢子の腰を、景悟は引き寄せた。

それに驚いて上体を起こそうとする夢子よりも先に、

ぢゅぷ…っ！♡

「……っあゝ、う…！！♡♡」

景悟は夢子の腰を逃さず完勃起したそれをいきなり奥まで差し込んだ。

「うそ…、景悟待って、抜いて…！」

「久しぶりのオレのちんぽ、気持ちいい？まんこヒクヒクしてる」

景悟はぴったりと腰を密着させたまま動かないで、それを堪能しているようだった。

景悟に言われたことは夢子にもわかっている。中の壁が景悟のちんぽの形を確かめるように締め付けているから。

「お願い…抜いて…」

「動かなくてもお前のまんこが吸い付いてくるからそれだけで気持ち一…。久しぶりの夢子のまんこ、最高」

景悟はしばらく味わうように動かないまま、夢子のナカがひくつくのを楽しんでいる。

いきなり奥まで突っ込まれて乱暴に広げられたそこは、ゆっくりとちんぽの形に順応していった。

……そう自分の体が変わられていくにつれ、夢子の理性もゆっくりと、溶けていくようだった。

(ちんぽ…、景悟のちんぽ入っちゃった)

「だ、だめだよ、こんなこと…」

(ちんぽもトクトクって脈打ってる…)

「私、結婚、したのに…」

(私のおまんこの奥が景悟のちんぽとキスして…あ、またちんぽ大きく……♡)

「だめ、だめなのに、」

(ちんぽすごい、硬い、大きい、)

「だめ…」

「……うるせーな、だめだめって…、体は全く抵抗してない奴が何言ってるんだ」

——どちゅっ♡

「あああ`…っっ！♡♡」

「夢子ちゃん言ってることとやってることバラバラだよ～？♡」

「本気で抵抗する気があるならしてくださいよ、俺たちも無理やりはしたくないんで」

「ちんぽ挿れられてエロい顔して味わってる奴が抵抗する気なんかあるわけねーだろ、おら動くぞ」

どちゅっ♡

どちゅっ♡

どちゅっ♡

「あっ♡あ…っ♡やっ♡や、あ…っ♡ちがう、だめ♡だめなの…♡あっ、う…っ♡♡」

うわ言のように「だめだめ」と呟く夢子のまんこに、景悟の硬い勃起ちんぽはまっすぐに出入りして奥にぶつかるたびに衝撃的な快感を送る…♡

夢子は喉をそらせちんぽを奥深くにぶつけられるたびに声を漏らした♡

（ちんぽでまんこ突かれるの久しぶり♡こんな硬いちんぽ久しぶり♡まんこ気持ちよくされるの久しぶり…♡）

どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡

「うあっ♡あっ♡はっ♡あッ♡ん、あっ♡」

「夢子ちゃん声出てきたね♡もっと気持ちよくなれるからいっぱい声出しちゃおうね♡」

葵がそう言いながら口を塞いでしまわないよう夢子の下唇に吸い付く♡

そして祥太は夢子の乱れかかった髪を撫で整えながら、現れた耳を舐め、舌を差し込んで♡

その二人の手は夢子の乳首を捉えると、景悟の腰に合わせ遠慮なくぎゅっと摘んだ…♡

「や…っ♡おまんこと乳首…、一緒は、だめ…っ♡ああ…っ♡♡あん…ッ♡♡」

「気持ちよさそうですね…♡言ったでしょ、夢子さんの性欲は俺たちが満たしてあげるからって♡」

「そうそう、なのに僕たちが誘わないから…♡焦らされてムラムラしてくれた？♡僕たちのこと欲しがってくれたかなあ♡」

「どういうふうにされるのがいいんだ？教える、なんでもしてやるから」

(なんでも…?)

ちんぽに奥を突かれ両乳首をくりくりとこねられ、唇と耳を舐め回され…♡

ずっと欲しかったものを与えられ、その上さらに「なんでもしてやる」と。

(…気持ちよくなりたい、もっと気持ちよくしてほしい…！)

「クリ……、おまんこ突かれたままでクリ触ってて、ほしい…」

夢子のそのおねだりに、三人が目を合わせたのがわかった。

その三人の目くばせで、

夢子は自分がまた堕ちたことを自覚した。

それでももう、止められないのだ♡

「いいですよ、じゃあ俺が触っててあげますね♡景悟にまんこ突かれて葵に乳首こねくりまわされながら、俺にクリコキされて気持ちよくなっちゃいましょう♡」

「あ…っ♡」

すぐに伸びてきてくれた祥太の手がクリトリスにかぶった皮を器用に下ろし、中指と親指でちんぽをしごくように上下に挟まれ♡

ちゅこ…っ♡

ちゅこっ♡ちゅこっ♡

と、ゆっくりしごき始めた♡

どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡

ちゅこっ♡ちゅこっ♡ちゅこっ♡ちゅこっ♡

くりくりくりくりくり…♡

「…は♡あぁっ♡あっ♡あ…っ♡あっ♡あぁッ♡」

(全部気持ちよくされてる…！乳首もクリもおまんこも…♡)

しばらく感じることでできなかった全身への快感に、
夢子は腰を突き出して浸る♡

（これだ…、この気持ちいいの好き…っ、体中を全部気持ちよくされるの好き…！！）

どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡
ちゅこっ♡ちゅこっ♡ちゅこっ♡ちゅこっ♡
くりくりくりくりくり…っ♡♡

「まんこすげー締まってる…気持ちいいのちんぽにまで
伝わるわ」

「クリも勃起きっちゃいましたね♡」

「じゃあまたイっとこっか♡夢子ちゃん♡」

「イ、く……♡♡イきたい、このままイきたい♡全部気持ちよくされてイきたい♡♡…あ、あ♡♡」

嬉しそうに顔をニヤつかせた葵に唇を塞がれたかと思えば♡

景悟が腰を掴み固定して、小刻みなピストンで奥を突き始めた♡♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっ♡♡

「っんん♡♡んあっ♡ん”っ♡♡んッあっ♡♡は、あむっ♡♡う”ん…ッ！♡♡」

クリトリスをしごく祥太の指も本当にちんぽをしごくように強い力で挟みこんで根元から先端まで勢いをつけて往復する♡♡

乳首も根元をしっかりと挟みこまれ、その薄い皮膚を引っ張るようにこねくり回された♡♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっ！！♡♡
ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこっ♡♡
ぐりぐりぐりぐりぐりぐり…♡♡♡

(気持ちいい♡気持ちいい♡気持ちいい…！♡♡)

「腰へこついちゃってんじゃん、お前ほんと気持ちいいことに弱いよなあ」

「体は嘘つけないですよ♡夢子さんのクリ、また真っ赤になってパンパン♡♡」

「……ふふ♡手足も腰も力んでる…、イきそうなんだね♡♡また気持ちよーく、イこうね♡♡」

「ん…ふっ♡♡うっ♡♡うう”うッ♡♡あ…ん♡あっ

♡」

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっ！！♡♡

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこっ♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐり…♡♡

硬いちんぽに揺らされる奥と、パンパンに張った状態でしごかれるクリトリスと、指の指紋にまで感じてしまうほど敏感になった乳首と、薄い皮膚を吸われ舐められる唇、

全部がまた夢子を追い詰める♡

「腕ぶるぶるしてる♡♡いま最高に気持ちいいよね♡気持ちよくていっぱいいっぱいになってる夢子ちゃんかわいい…♡♡」

「クリも気持ちよさそうにピクピクして♡その状態でしごかれるのたままないですよ♡♡」

「まんこもめっちゃ締まってる…奥がきゅーって…、オしも出そう」

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっ！！♡♡

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこっ♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐり…♡♡

「うあ” あ♡♡♡イク、イク…ツツ♡♡これイっちゃう
…！♡♡う、んん” ……………ツツツ！！♡♡♡」

……ビク、びく、びく♡♡♡

夢子は自ら景悟の腰にぶつけるように腰を突き出し、
何度か大きくその腰をへこつかせて、
昇り詰めた…♡♡

(最悪……、)

ぐったりと横たわっても余韻は消えない。
まだ体の奥が燦っている。

(結局負けちゃう、自分が最悪すぎる)

冷静になった頭が自分を責め始めたとき、

「夢子ちゃん！次は僕♡♡」

「うわ…！」

葵が夢子の体を抱きかかえた。

そのまま持ち上げられ葵の膝に座らせられそうになり、それに対して夢子は「もうだめ」とまた大して意味のない拒否をしようとした、

そのとき。

ヴヴヴヴヴ……

「……………電話？」

リビングのほうでスマホが震えている音が聞こえた。何かの通知の音という感じではなかった。長く振動している。

「仕事の電話かも…！」

夢子がそう呟くのと同時に、祥太がすぐにベッドから降りリビングへ向かった。

夢子のバッグを持って小走りに戻ってきてすぐにそれを夢子に手渡す。

「仕事」と聞けば四人一斉に頭が切り替わる。夢子は表

情には出さなかったがそれが内心なんとも面白かった。
お互いに信頼しているところでもある。

だがスマホを取り出して画面を見た瞬間、夢子は青ざめた。

その顔を見て三人もスマホを覗き込む。

「あー…」

景悟が意味ありげに声を出す。

夢子の頭の中に一瞬にしているろんな感情が駆け回った。

それでもすぐに通話ボタンを押した。

「もしもし…」

『あ、もしもし、いま大丈夫？』

夫だった。

「大丈夫だよ、どうかした？」

『今日って友達とご飯行ってくるって言ってたよね？夜はどうする予定？時間合えば待ち合わせして買い物行けるかなーって』

「え…っ、」

しん、と静まった景悟の寝室で、恐らく夫の声は三人

にも聞こえてしまっているだろう。

その状態で三人に囲まれ電話する夢子にさらに緊張が走る。

「えっと…今日友達でご飯じゃないよ、今日は景悟の誕生日パーティー行くって言ったでしょ」

『あー！！あれ今日か！ごめん勘違いしてた！』

三人の顔が見れない夢子だったが、ふいに腰を掴まれ顔をあげた。

さっきまで夢子は葵の膝の上に乗せられそうになっていた。葵はまだ諦めてないらしい。

中途半端に乗っていた夢子の体を自らの中心へ誘導して、夢子が拒否する暇も与えず自らの腰へ夢子を降ろした。

「……っ！」

夫が景悟の誕生日がどうか話しているが、夢子の耳には届かず。

無理やり貫いてきた葵のちんぽは夢子の奥深くにぶち当たり、冷静になってしまっていた夢子のスイッチを押してしまっている。

『でさ、景悟くん何か欲しいものあるかな？ 普段夢子がお世話になってるし何かプレゼントしたいな』

「…………夢子が欲しいって言っとい——うぐ、」

ぼそっと、そうこぼす景悟の口を、祥太がすぐさま手で塞ぐ。

夢子が乗っかっている葵の表情は興奮していることがわかるほどで、夢子は疼くナカをなんとか無視してじっと動かないでいた。

（早く電話終わらせなきゃ、このままじゃバレル…！
！）

「ごめん呼ばれちゃった！ 行ってくるね、景悟にはまた聞いておくから」

『うんわかった、俺も邪魔してごめんね、気をつけて帰っておいでね』

慌てて終話ボタンをタップしてスマホを投げた。

通話が終わって、祥太は景悟の頭を軽くはたく。

「バカ、バレたら全部終わるんだぞ」

「本当のことだし」

「でもさー♡夢子ちゃんもちょっと興奮してたんじゃない

い？♡」

「んあ…ツ、」

葵が待ってました、と埋めていたちんぽを突き上げた。

「おまんこ、うねってたし♡あの状況でもちんぽ欲しくなってたでしょ♡♡」

そう笑って嬉しそうに腰をへこへこと上下に振っている。

「というか、夢子も旦那にオレたちとの状況バレないようにしてた時点でもう共犯だよな」

「まあそうですねえ、秘密の共有できちゃいましたね♡それもバレたらお互い終わっちゃうレベルの♡」

ぬぽ…っ♡

ぬぽっ♡ぬぽっ♡

信じられないこの状況を心底嬉しそうに、純粹に笑う三人を、

夢子は心の底から憎むことはできない。

葵の膝に乗ったまま、呟いた。

「責任、取ってよね」

「任せといてよ♡とりあえず僕のちんぽでも気持ちよく
なってほしーな♡♡ほら夢子ちゃんもちゃんと腰落とし
て♡いっぱいばんばん♡しよ♡♡」

「…っあゝ！！♡」

葵が夢子の腰を掴んで、一気に落とした…♡

太い葵のちんぽが夢子のそこを一気に広げて♡♡

その衝撃に夢子は喉をそらせ、はくはくと息を吸う♡

それから葵は夢子の腰は固定したまま、腰をまた上下
に揺らし始めた♡

ばんっ♡ばんっ♡ばんっ♡

ばんっ♡ばんっ♡ばんっ♡

「あっ♡あぁっ♡あ…ッ♡♡あぁっう♡♡う、あぁ…♡
♡」

「僕のちんぽが夢子ちゃんのおまんこ広げてるのしっか
り見えるよ…♡僕の根元から先っぽまでの太さなぞるみ
たいにおまんこ広がって閉じて…♡♡すっごいえっち♡
♡♡」

ばんっ♡ばんっ♡ばんっ♡

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

そのちんぽの太さに広げられて閉じられる入り口がとんでもなく気持ちいい♡

気付けば夢子は葵の肩に手を置いて、葵の腰に合わせて腰を振ってしまっている♡

限界まで足を広げ対面座位で葵に跨り、ガニ股の下品な格好で上下に腰を振っている♡

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

「はっ♡あっ♡あっ♡はっ♡あッ♡いいっ♡ちんぽいいっ♡あぁっ♡」

「僕のちんぽで気持ちよくなってくれて嬉しい♡もっと一緒に気持ちよくなる♡夢子ちゃんのエロまんこ♡僕の太ちんぽでいっぱい入り口擦ってあげる…♡♡」

「じゃあ素直になってきたご褒美に、オレはクリ〇〇〇でやる」

「俺も気持ちよくしてあげたいなあ♡勃起っぱなしの乳首きゅー…ってしててあげますね♡」

「あ……して、して…、♡」

景悟の指がクリトリスをぎゅうっと挟んで圧迫し、祥

太の指も乳首を根元からきゅーっと圧迫してきた♡

挟まれた小さなクリトリスは潰されてドクドクと脈打ち、根元から伸ばされるように挟まれた乳首は薄い皮膚がチリチリとくすぐるような焦った快感を送ってくる♡

二人はそれぞれ挟みこんだままぐりぐり♡とひねり始めた♡♡

ぎゅー…♡♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡
ぐぐりぐりぐりぐりぐり…♡♡

「っはあ♡♡あぁっ♡♡気持ちいい…♡♡それ気持ちいい♡♡」

「おまんこパンパンは～？♡♡ちゃんと全部感じてくれなきゃ♡♡」

「おまんこ♡パンパン♡されるのも気持ちいい…！♡全部一緒に気持ちよくされるの♡最高…♡♡」

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ！！♡♡
ぎゅぎゅっ♡♡ぎゅーっ♡♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡
ぐりぐりぐりぐりぐり…っ♡♡♡

三人に囲まれ性感帯全部をいじられて♡

振っていた夢子の腰が小刻みな動きに変わった♡♡

へこへこへこへこへこへこへこへこ…♡♡♡

「…ううっ♡♡気持ちいい、気持ちいい！♡またイっちゃ
う…♡♡♡」

もうどれほど情けない格好だろうと恥ずかしいとすら
思わなかった♡

夢子は自分が気持ちよくなるために一心不乱に腰をふ
りたくっている♡♡

気持ちいい感覚に追い詰められてそれが余計に体中を
敏感にさせる♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ！！♡♡

ぎゅっ♡♡ぎゅっ♡♡ぎゅうううっ♡

ぐりぐりぐりぐりぐり…っ♡♡♡

へこへこへこへこへこへこへこ…♡♡♡

「あ……………うッッッ♡♡♡や、ば……っ♡♡」

「夢子ちゃんイきそ〜？♡すごいおまんこ締めつけて
くる…♡僕もめちゃくちゃ気持ちいい♡♡」

「ていうか本気で腰振ってんのエロすぎ…、吹っ切れちゃ
ったか」

「いいですよ夢子さん♡♡このままイっちゃいませよ♡

♡」

夢子の腰に合わせて動く葵の腰、
力いっぱい圧迫されるクリトリス、
引っ張られて鋭い快感を与えられる乳首、

「い、く…！いゝく…ツツ！！！」

夢子は葵の上で背中を丸めて全身を引き攣らせる♡♡
そのままカクカクと腰が痙攣して♡♡

「あゝ ……ツツ！！イ…って、うゝ う…っっ！♡いって
る、いってる…う♡♡♡♡あ…ツツツ♡♡…っっ！！
♡あゝ っ♡あゝ ツ♡あゝ ……うツツ！！♡♡♡」

絶頂中、ずっとカクカクと小刻みに痙攣する腰に、三
人は釘付けになった♡

本気イキを目の当たりにしてたまらなくなかぶってい
く♡♡

「夢子さん、次俺…」

「は…、あ……、う、うん…」

まだ絶頂の余韻も抜けず体も震えたままだったが、それでも求められ夢子はすぐ祥太の前に寝転がった♡

「ごめんなさい、俺も夢子さんの中に出したくて♡もう最初から突いちゃいますね…♡♡」

ぐちゅ……ぬ” ぢゅ……っ♡♡

祥太のガチガチに勃起したちんぽは夢子の閉じていくナカを押し返して、

ごちゅっ♡♡

すぐに奥に到達した♡

「夢子さんのまんこ気持ちいいです…♡イったばっかなのにもう俺のに吸い付いてくれて♡」

ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡

祥太の長いちんぽが、ぎりぎりまで出て行って勢いを付けて奥まで辿り着いて♡

また膣壁を引きずるように出て行って奥まで押し戻される♡♡

夢子は横たわったまま、打ちつけられる腰から逃げないようにするのに精一杯だった♡

三人の中で一番背の高い祥太は打ちつける衝撃も大きい♡

ごちゅごちゅごちゅごちゅっ♡♡

ごちゅごちゅごちゅごちゅっ♡♡

「うん…っ♡ん” …っ♡♡あっ♡あ…ッ♡」

体を押し上げられて漏れる声♡

シーツを握り締めて衝撃に耐える夢子を、葵が後ろから抱きかかえた♡

そして横からは景悟も♡

二人に後ろから横からと抱きしめられ、葵は二人の腕の隙間から覗く乳首をカリカリと爪先で擦り、景悟は熱い舌を夢子の口内へ差し込みそのまま絡んだ舌を外へ誘い出した♡♡

舌のきわをチロチロとなぞり、フェラするように根元から先までを唇をすばめて往復する♡♡

ごちゅごちゅごちゅごちゅっ♡♡

カリカリカリカリカリカリ…♡♡

ちゅぽ…っ♡♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡

「…ふ、あぁッ♡♡あゝ、うっ♡♡♡ん、ん…ッ♡んゝ
う♡♡」

葵と景悟の腕にきつく閉じ込められ体同士が密着し、
更に祥太に揺らされる腰♡♡

三人にもみくちやにされる♡♡♡

興奮してかいている汗も、混ざりあっている♡

(旦那に嘘ついてまでこんなことしてる…、もうだめだ、
私…)

ごちゅごちゅごちゅごちゅごちゅっ！！♡♡

カリカリカリカリカリ…ッ♡♡くりくりくり♡♡カリ
カリカリカリ…ッッ！！♡♡

ちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽ…♡♡ちゅ、っぽ♡♡ちゅ
っぽ♡ちゅうううっ♡♡♡

また気持ちいい感覚を追って、夢子の腰が動く♡

祥太のちんぽを受けとめ♡葵に乳首を○○○られ♡景
悟に舌をフェラされ♡

喉をそらせて足がピンと突っ張っている♡♡

「……ふ♡夢子さん♡イきそうですか♡♡首真っ赤にな
って筋浮いてる♡♡」

「乳首ももうパンッパンに膨らんでるよ♡♡先っぽカリ
カリ♡されて根元こねられるの気持ちいいね♡ほらぁ♡
ぎゅーってこねると足の指ピクピクしちゃう♡♡ちゃん
と両方してあげるからね♡♡」

「相当気持ちいいんだな、自分から思いっきり舌突き出
して…素直に快感追ってる夢子かわいい」

葵と景悟の抱きしめる力が強くなる♡

腕ごと抱き込まれてまるで拘束されているように体の
自由が効かない♡

夢子は手をぎゅっと握り込んで、唯一自由に動く足を
ピンっと張って♡

広いベッドの上、

絡みあってる四人の熱気がそこを包んでいた♡♡

そして夢子はその熱気の中、三人の腕の中で絶頂へ向
かう♡♡

ごちゅごちゅごちゅごちゅごちゅっ！！！！♡♡♡

カリカリカリカリ♡♡くりくりくりくりくり…！♡♡
♡

ぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽっ♡♡ぢゅぽお…っっ♡♡
♡ぢゅうううっっ♡♡♡

「あゝ ああ…ッ！！♡♡いいっ♡♡すご、すごい♡♡おまんこも乳首も舌もいゝ いっ♡♡気持ちいいっ気持ちいいっ♡♡♡ううゝ …っっ！♡♡あっ♡♡あぁっ！♡♡も、イク…♡♡もっとな♡♡おまんこももっと強い…っ！♡♡♡」

「俺も、もうイきそう♡♡夢子さんのおまんこ、俺のにちゅーって♡してくれて♡可愛い…♡あー—……♡♡いく♡♡」

仕上げとでもいうような激しいピストンで夢子の腰へ自らの腰を打ちつけ♡♡

祥太はチン先を夢子の奥へめり込ませるほど奥へ突き上げた♡♡♡

………ばぢゅんッッッ！！！！♡♡♡

「……ッッッ♡♡♡…あ、はっ♡」

「………あ～…出てる、腰とろけそう…♡」

中で祥太のちんぽが震えている♡♡

夢子も絶頂からなかなか降りてこれず、下半身は震えっぱなしだ♡♡

萎えたちんぽを祥太が抜いても、そこはひくひくとまだ誘っている♡♡

何か吹っ切れた夢子は自ら足を広げ、見せつけるように指でそこを開いた♡♡

「……………ねえ、お願い、まだ…足りない♡♡♡」

「…夢子さんにそんなこと言われたらすぐ勃っちゃいますけど」

祥太にしては珍しく強い力で夢子を抱き上げ♡

四つん這いにした夢子のまんこへまた最初から遠慮なく、ぼちゅ…！！♡と突き入れた♡♡

腰を掴む手も普段の祥太からは想像もできないほど強い♡

その手が〇〇に夢子の腰を、まるでオナホでちんぽをしごくみたいに前後に動かし始める♡♡

「あゝッ！♡あゝっ！！♡♡あゝ あアッ！！♡♡やば、

気持ちいい！！♡♡イったばかりのおまんこ♡♡無理やり突かれるのすごい…！！♡♡♡」

「すっかり4Pセックス気に入ってくれたみたいで嬉しいです♡これからちゃんと俺たちが夢子さんのこと満足させますからね♡♡旦那さんは許しますが他の男なんて絶対許しませんよ♡♡」

「しない…っ、他の人なんて…このちんぽがいい、三人のちんぽがいいの…♡♡♡」

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅ…っっ！！♡♡♡

祥太に乱暴に腰を動かされ髪を振り乱して喘ぐ夢子を、今度は景悟が前から抱きしめた♡

上体を起こされるとナカのちんぽはまた今までとは違うお腹の裏側をえぐってくる♡♡

そして景悟はもう片方の手で乳首を引っ張り、伸び切ったところでピンっと弾いて解放した♡♡

そうされると乳首から強烈な快感が頭から足の先まで走り抜けていく♡♡♡

その手も高速になっていって夢子はもう自分の足で自らの体を支えられなくなっていたが、それも祥太に腰を固定されて足は浮いたままガクガクと震えっぱなしになってしまった♡♡

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅっ！！！！♡♡♡
ぎゅっぽ♡ぎゅっぽ♡ぎゅっぽ♡ぎゅっぽ♡ぎゅっぽ
♡

「や、あゝ…っっ、それ、だめ…っ♡♡♡乳首、そんな、
しちゃ……♡♡♡」

あまりに気持ちよくてお腹の下、子宮がきゅーっと締
まっていくのが自分でもわかる♡♡

腹筋に力が入ってもっと気持ちよくなろうとしてしま
う♡♡

「じゃあ僕はクリちゃんぽも引っ張ってあげる♡♡クリち
んぽ射精させるみたいにぎゅってして限界まで引っ張っ
て…♡♡♡そのまま先っぽぐりぐりぐり～♡♡♡」

「あゝ あゝ あああ…！！！！♡♡♡」

「う、わ…それするとまんこすっごい…♡♡」

「じゃあもっかいね♡♡♡ほらぎゅー♡って伸ばして♡
♡クリちゃんぽの先っぽぐりぐりぐりぐり～…♡♡♡」

「……………ツツツ！！！！♡♡♡いゝっっっ、く……………ツ
ツツ！！！！♡♡♡」

小刻みピストンでまんこの奥を責め立てられ、乳首も

クリトリスも引っ張った先をこねくり回され♡♡

ガクガクガクガク……、♡♡♡

夢子は景悟にしがみついて絶頂した♡♡

■続きは製品版にて♡